

アルベール・カミュの「直観」と『異邦人』

阿部 いそみ

カミュの小説「直観」は、完成作品ではなく初期の習作に過ぎない。しかし従来から指摘されているように、そこには作者が生涯にわたって追求したテーマの萌芽や、カミュの作品世界の本質的要素を見出すことができる。本稿ではこの解釈の立場に沿いつつ、さらに発展させ、「直観」が『異邦人』の極めて重要な草稿資料である可能性を提示することを目的とする。「直観」を構成する一作品「妄想」は、『異邦人』最終章と多くの類似点（「妄想」の狂人と『異邦人』の刑務所付司祭との類似など）を持つ。この考察にもとづくと、『異邦人』最終章に描かれる主人公と刑務所付司祭をめぐる一つの謎、すなわち刑務所付司祭の言動を写し取る主人公像という特殊な様相、を解明するための手がかりが得られる。考察を通じ、刑務所付司祭とは主人公のもう一人の自分、として捉えられることが明らかとなった。さらにこれは、『手帖』に記された構想メモによっても裏付けられた。

序

カミュの文筆活動は1931年にはじまる。この年アルジェリアで月刊誌『南』が創刊され、カミュは翌年の1932年にかけて6篇の文章を寄稿している。発表した文章は、評論が4篇（文芸評論2篇、哲学評論1篇、音楽評論1篇）であり文学作品は2篇（詩1篇、コント1篇）にとどまるが、この時期のカミュが評論活動を重視し、創作活動をなおざりにしていたわけではない。1932年に、「直観」という5つの作品からなる小説を創作しているのである。

しかし「直観」は完成された作品というよりも草稿に過ぎず、没後10年以上が経過した1972年、『カイエ・アルベール・カミュ』第2巻への収録という形でようやく発表されるに至った。このような経緯もあり、「直観」に作品としての高い評価が与えられることはあまりない。とはいえ、ジャクリューヌ・レヴィ＝ヴァランシ¹のように、この作品にカミュの世界が持つ本質的特徴の萌芽を認め、その重要性を指摘する立場もある。

本稿は、「直観」の重要性を認める立場に沿いつつも、この作品にはさらに別の重要性が見出されることを明らかにすることを目的とする。それは具体的には、この作

品と『異邦人』最終章の類似という特徴である。

以下ではまず、「直観」をめぐるこれまでの研究をたどり、その傾向を確認することからはじめる。次に、『異邦人』最終章と「直観」との類似点について指摘する。そしてこの考察結果にもとづき、『異邦人』の主人公ムルソーと刑務所付司祭との間に存するある様相に関して、新たな解釈の可能性が開かれることを提示したい。

I

「直観」はあまり重要視されてこなかった作品である。この傾向が形成された要因として、形式面での完成度の低さがあげられる。この小説はタイトルの付いた5つの文章から構成されているが、それらにはページ番号がふられていない。1972年刊行の『カイエ・アルペール・カミュ』第2巻に収録された際の順序は、編者ポール・ヴィアラネーの「最も理に適った」という判断にもとづくものである。

[...]「直観」のテキストを刊行するのに選ばれた順序は、筆者の指示があったわけではないが、最も理に適ったものと思われる。²

このような形式面での完成度の低さに加え、プロローグ中の言葉もまた、高い価値が与えられてこなかった一因と考えられる。

こうした夢想は大いなる倦怠から生まれた。³

これに言及し、例えば西永良成は次のように指摘する。

[...] 作者自身さえ「大きな煩悶から生まれた夢想」だとはことわらざるをえなかった『直観』からすけてみえるのは、現実がもたらす諸々の矛盾の前に無力な青年の不安とあせりである。したがって、評論家アルベレスによって「ニーチェとともに生を思い、ドストエフスキーとともに死を思う」と評されたこの時期のカミュにとって、芸術は彼の外にあり、手をのばしてとらえようとすれば、無情にも退く気配さえみせる魅惑的な幻だったと書いても、さして間違いではないだろう。⁴

カミュ自身が明らかにしているように、作家になる決心を与えたのは1933年の『孤島』との出会いであった。

『孤島』を発見したころ、自分でもものを書きたいと望んでいた、と私は思う。しかし、ほんとうにそうしようと決心したのは、この本を読んだあとでしかなかった。他の本もそうした決意に貢献した。だが、役目がすむと、それらの本を私は忘れてしまった。ところがこの本は、読んでから20年以上たったいまも、ずっと私の内部に生きることをやめていない。⁵

「直観」を執筆していた時期（すなわち『孤島』に出会う1933年以前）のカミュにとって、芸術とは夢想的な幻に過ぎなかった。『カイエ・アルベール・カミュ』第2巻の編者ポール・ヴィアラネーも同様に、初期の未発表作品について次のように述べている。

[...]『裏と表』や『結婚』や『異邦人』のように、印刷に値すると判断された初期作品の形式的な完成を呈してはいない。またそのいずれもが、『幸福な死』の豊かさにも達してはいない。⁶

けれども、ポール・ヴィアラネーは続けて指摘する。

だがそれらは、カミュが、まさに彼のものでしかない一つの肉声を自らに与えるために課した、執拗でひそかな努力を示すものだ。そしてそれらは、1958年に『裏と表』のために書かれた序文がそのことを精一杯思い起こさせているように、全生涯にわたって忠実に彼が仕えた或る靈感の到来をしるしている。⁷

実際にカミュは、『裏と表』⁸の序文中で次のように一つの信念を明らかにしている。

一つの言語をつくりあげ、神話を生かすための多くの努力を傾けたにもかかわらず、もし私がいつか『裏と表』をふたたび書くことができなければ、私は決してなにもものにも到達しないだろう。これこそ私の漠たる信念だ。[...] 一人の人間の仕事とは、かつて一度、はじめて心がひらかれた二、三の単純で偉大なイメージを、芸術という紆余曲折を経て再発見する、そのための長い道行き以外のなにもものでもない。そこにこそ多分、20年にわたる仕事と創作活動のあとで、いまなお私が、私の作品はまだはじめられてさえいないと思いながら生きている理由があるのだ。(I, p. 38)

このように『カイエ・アルベール・カミュ』第2巻に収録された初期作品のうち、『裏と表』の原型である作品群の重要性については、作者自身による表明もあり明確に裏付けられている。他方、『裏と表』の原型でもなく、またアルジェリアの月刊誌『南』に発表されることもなかった作品は、その重要度は低いと認めざるをえない。そして5つの文章からなる「直観」もまた、重要性を認められてこなかった作品群に属している。

しかし「直観」を子細に分析すると、『裏と表』と同様にカミュが生涯にわたって追求した世界を見出すことができるのである。例えば白井浩司は、「直観」を構成する一作品「ぼく自身への回帰」をとりあげ、そこにカミュ独特のレトリックがあると述べている。

「ぼく自身への回帰」では、「いいかい、ぼくがぼくの思想のなかに求める統一なんて存在しやしない。でもぼくは、この思想の原理そのものとその統一とは、統一を持ってないという事実のなかに存在すると信じている……。」カミュ独特のレトリックが顔を見せているし、不条理の思想への手がかりさえ見出せ

るようだ。⁹

白井浩司はさらに「祈念」にもふれ、「ぼく自身への回帰」以上に『シーシュポスの神話』に通じるカミュ固有の世界が展開されていると指摘する。

[...]「祈念」ではカミュ的レトリックがもっと鮮明な姿を見せる。[...]「ぼくはそのことに悩んでいる。あらゆる矛盾に悩んでいるのと同じだ。ぼくの内部で、ぼくはすべてを和解させる……。ぼくが外在的矛盾を破壊できないことはやはりあきらかだ。外在的矛盾とは人生の本質そのものであり、それを前にしてぼくは無力だ。だからぼくの苦悩は癒し難い。」対立し、矛盾する二つのもののどちらかをえらぶというのではなく、その二つのものを共存させるというのが『シーシュポスの神話』におけるカミュの基本的態度である。¹⁰

そして「不確実なるもの」については、次の見解を明らかにしている。

「不確実なるもの」のなかでカミュは、方法的無関心を求める。「……ぼくがそこに存在していない行為の準則を決めることに疲れた……。ぼくは強くはない。ぼくは無関心でいないと思う。」ムルソーの無関心、『裏と表』にでてくる青年の無関心、その萌芽はすでにここに見られるといえよう。¹¹

また、ジャクリーヌ・レヴィ＝ヴァランシも同様の指摘をしている。

On trouve aussi dans « Incertitudes » l'esquisse de certains traits qui deviendront significatifs de sa pensée : l'affirmation qu'« *il y a une liberté qui consiste à se donner et à s'enchaîner* » [...] pourrait être un des préceptes que Zagreus enseignera à Patrice Mersault ; on sait aussi la fortune qu'aura « *l'indifférence* » dans *L'Etranger* [...] ¹²

「直観」にカミュの世界を形成しているさまざまな本質的要素の萌芽を認め、特に「不確実なるもの」については、『異邦人』（及び母胎となった作品である『幸福な死』に関して）の無関心を見出している。そして「直観」と『異邦人』との関連をめぐり、「妄想」の一節に言及し次のように述べている。

[...] quand le Fou est tenté de vivre « *comme tout le monde* », il dit : « *Je voudrais avoir femme et enfants, gagner de l'argent, avoir un nom et la considération des gens de bien* » [...] Or, on retrouve une définition toute semblable de la banalité sociale dans une page des *Carnets* datée de 1937, où Camus lui-même voyait « *la première formulation consciente de L'Etranger* » [...] ¹³

作品中で登場人物が、皆と同じように家庭を持ち、誠実な人々から敬意をはらわれたいという望みについて話す箇所がある。この一節は上記の指摘にあるように、『手帖』の1937年8月付で記されたメモに類似する。そしてそれはカミュ自身の説明によると、『異邦人』のテーマを初めて具体的に示したメモである。

Août 37. Un homme qui a cherché la vie là où on la met ordinairement (mariage, situation, etc.) et qui s'aperçoit d'un coup, en lisant un catalogue de mode, combien il a été étranger à sa vie (la vie telle qu'elle est considérée dans les catalogues de mode).¹⁴

さらにジャクリーヌ・レヴィ＝ヴァランシは、「嘘にとどまろうとする意志」の中には『異邦人』の萌芽的要素があるとしている。

Ce monde est banal, il n'offre rien sur quoi les sens ou la pensée puissent prendre appui ; de plus, il se fond dans la nuit. Curieusement, les choses y deviennent vivantes, mais le narrateur refuse leur présence, remarquant, en des termes que le héros de *L'Etranger* ne désavouerait pas « *J'étais ennuyé qu'il y eût des étoiles* » [...] ¹⁵

この作品には、世の中に何の価値も見出すことができないと考える男が登場する。しかしあるとき語り手の私とこの男は、夜が事物を活気づけることに気付く。

ぼくは暮れ方に野原に落ちてくるあの神秘的な匂いを大気のなかに探し求めた。 [...] 平原は、とても遠くの方まで見渡せた。そしてだんだんに近づいてきた夜が、一つ一つの事物を生き生きとさせることでそれらを切り離し、その見事さに、ぼくらは立ちどまったほどだった。(I, p. 948)

ところがこの男は続けて言う。

[...] 私を安らぎと静寂で満たしてくれていたこうした光景は、昔の悲しみから生まれる倦怠を、私の心のなかでただただ掻きたてるばかりなのだ。もはや私は未来に希望をいだいたりはしない。もはや私は自分を信じてはいない。私は、もはや自分の過去を楽しむすべも知らない [...] (I, p. 948)

平原を訪れる夜の光景は、かつてはこの男を安らぎと静寂で満たすものだった。ところで、星々に満ちた夜によってもたらされる安らぎとは、『異邦人』¹⁶最終部に描かれるテーマでもある。

顔の上に星々のひかりを感じて眼をさましたのだから [...] 夜と大地と塩のにおいが、こめかみをさわやかにした。この眠れる夏のすばらしい平和が、潮のように、私のなかにしみ入って来た [...] あの養老院のまわりでもまた、夕暮れは憂愁に満ちた休息のひとつきだった [...] このしるしと星々とに満ちた夜を前にして、私ははじめて、世界の優しい無関心に、心をひらいた。

(I, pp. 212-213)

「嘘にとどまろうとする意志」そして『異邦人』のいずれにも、夜の匂い、大地、平原、世界、星、平和、安らぎという要素がある。

このように、「直観」を構成する諸作品と『異邦人』の間にはさまざまな類似が存在している。確かに、ページ番号の不在といった形式面の特徴から見ると、「直観」は完成作品ではなく断片的文章に過ぎない。しかし、『裏と表』に比べても全く遜色がない、カミュの作品世界の本質的要素が含まれている。このような点を考え合わせると、「直観」は単なる断片的文章ではなく、『異邦人』に結実する重要な草稿資料である可能性を持つ。

従来の研究においても、「直観」と『異邦人』との類似をめぐる言及がされてきた。ただしここでは、描かれたテーマや概念レベルでの類似を指摘するという段階にとどまっている。しかし「直観」の諸作品を子細に見ていくと、『異邦人』最終章の場面と多くの点において共通要素を持つことがわかる。次章ではその詳細を示していきたい。

II

『異邦人』の第2部第5章、すなわちこの小説の最終章に、死刑囚ムルソーの独房を刑務所付司祭が訪れる場面がある。このシーンには、「直観」を構成する作品「妄想」といくつかの点で類似を見出すことができる。

1) 論ず人物の訪問と主人公の反応

まず、ムルソーの独房に入ってくる司祭が描かれる箇所を見てみよう。

まさにこのとき司祭が入ってきた。彼の姿を目にすると、私はちょっと身震いした。司祭はそれに気づいて恐れないようにといった。(I, p. 208)

他方「妄想」の冒頭は次のようにはじまる。

その狂人がぼくの部屋に入ってきたとき、ぼくはとても悲しかった。ぼくは悲しかった。なぜならぼくは、過去の自分のままではいたくないと、とても強く感じてはいたものの、かといって自分が何になりたいのかわからなかったからだ。ぼくは人生の意味を、ぼくが知らないこの生の意味を探し求めていた。

(I, p. 943)

いずれの場面においても、主人公が一人である空間に他者の訪問がある。そして主人公はいずれも、その状況に対して何らかの否定的感情をいだく。『異邦人』では主人公ムルソーが独房におり、刑務所付司祭が面会に訪れる。ムルソーはそのとき恐怖感から身震いをする。また「妄想」の冒頭では、主人公が一人である部屋へある狂人が入ってくる。そのとき主人公は、悲しさを感じる。また、「妄想」の登場人物である狂人の職業は明らかではない。しかし幸福、人生、愛、そして神をテーマに論ずという点で説教師的である。そのため、『異邦人』の刑務所付司祭に通じる要素を持っている。

2) 複数回の訪問

『異邦人』において、刑務所付司祭はムルソーに拒絶されながらも複数回にわたって訪問を試みている。それは次のそれぞれの文に明らかである。

- ・三たび、私は司祭の面会を拒絶した。(I, p. 204)
- ・司祭の訪問をまたもや拒絶したのは、こうしたときだ。(I, p. 208)

さて「妄想」の登場人物である狂人もまた、主人公の部屋を複数回訪れている。訪問した状況が明示されている文を列挙する。

- ・その狂人がぼくの部屋に入ってきたとき、ぼくはとても悲しかった。
(I, p. 943)
- ・ところが或る日、彼がやってきた。(I, p. 944)
- ・[...] 例の狂人がぼくの部屋に入ってきた。(I, p. 947)

「妄想」における訪問者は、主人公の部屋を3回訪れている。このように『異邦人』及び「妄想」いずれの作品でも共通し、主人公が一人である空間に複数回（約3回）の他者による訪問が描かれている。

3) 待つ立場としての主人公

ポール・ヴィアラネーも指摘しているように、「直観」を構成する諸作品の主人公はいずれも「一つの部屋に閉じこもっている」¹⁷。そして「妄想」も例外ではない。「妄想」の主人公は、常に狂人が自分の部屋を訪れることを待っているのである。

ぼくは長いあいだ例の狂人を待った。(I, p. 944)

これは『異邦人』のムルソーの置かれている立場、すなわち独房で待つのみという立場に共通する。『異邦人』において待つ (*attendre*) という表現¹⁸は、次の箇所に見出される。

- ・[...] 横になり、手枕をして、私は待っている。(I, p. 204)
- ・[...] 彼らがやって来るのは夜明けだ。私はそれを知っていた。結局、私の夜々はあの夜明けを待つことだけに過ぎされた。[...] 私は昼間少ししか眠らず、夜は、夜もすがら暁のひかりが空のガラスのうえに生まれ出るのを、辛抱よく待った。いちばん苦しいのは通常彼らのやって来ることを私の知っている、あのどうもあやしい時刻だった。真夜中を過ぎると、私は待ち構え、見張りしていた。[...] どんなかすかなきしみにも戸口のところへ飛んでゆき、板に耳をおしつけて、夢中になって待ち構えていたので [...] (I, p. 207)
- ・私はまるで、あの瞬間、自分の正当さを証明されるあの夜明けを、ずうっと待ち続けていたようだった。(I, p. 212) (強調下線は筆者)

このようにいずれの作品でも、主人公は徹底して待つという立場に置かれている。

4) 空を眺める空間にいる主人公

『異邦人』最終章において、主人公ムルソーがいる場所は独房である。独房の様子が描かれている箇所を見てみよう。

独房が変えられた。その部屋で長く寝そべると、空が見える。そして空しか見えない。その空のおもてに、昼から夜へと移る色彩の凋落を眺めることで、一日が過ぎていく。(I, p. 204)

独房の窓から見えるのは空に限定されており、ムルソーは常に空を眺めて一日を過ごしている。司祭の面会を拒絶したときにも、空を眺めていた。

司祭の訪問をまたもや拒絶したのは、こうしたときだ。私は横になっていた。空の黄金色に染まるのを眺めていて、夏の夕暮れの近いのがわかった。
(I, p. 208)

そして窓の種類は天窓である。それは次の一節から明らかである。

今度は私がわきを向いて、天窓の下に行った。(I, p. 210)

このようにムルソーは独房の天窓から、常に空を眺めて過ごしている。他方、「妄想」においても同様に主人公が空を眺めるくだりがある。

ぼくは、飽きあきした自分の部屋を眺めていた。ぼくは高い所を、とても清らかな空の一角を眺めていた。(I, p. 947)

このようにいずれの作品においても共通して、主人公が上空を眺める描写がある。

5) 暁と牢獄

「妄想」の主人公がいる空間は独房ではない。しかしそこには、囚人の世界を暗示する要素を認めることができる。「妄想」の結末部に次の文章がある。

[...] それではいつ、ぼくのために、ぼくの決意の大胆不敵な暁が身をもたげるのだろう。(I, p. 947)

ここに、暁という表現が見出される。この語は、『異邦人』の主人公ムルソーにとって特別な意味を持つ。すなわちこれは、死刑執行人がやって来る時間の象徴に他ならない。

また「妄想」の狂人は、人々によって牢獄に幽閉される存在でもある。

だが人間たちはその狂人を閉じこめてしまった [...] だがその牢獄から、狂人は相変わらずこう言いつづけていた。(I, p. 946)

「妄想」には死刑囚や牢獄に通じるテーマを認めることができ、この点からも『異邦人』と類似する。

6) 強い信念や確信

アルフレッド・ノイアー＝ワイドナー¹⁹も指摘したように、『異邦人』最終章には論証に用いる表現や抽象的語彙が多い。例えば、次の一節では「確信」(sûr)を意味する言葉が繰り返し使用されている。

その点確信があるのか、と彼が尋ねたので、私は、それをくよくよ考えるようなことはしない、そんなことはつまらぬ問題だと思う、といった […] すると彼はうしろに反りかえって […] 自分では確信があるような気がしていても、実際はそうでないことがあるものだ、とつぶやいた […] 私は現実に何に興味があるかという点には、確信がないようだったが、何に興味がないかという点には、十分確信があったのだ […] (I, p. 209) (強調下線は筆者)

強い信念や自信への言及は、ムルソーが司祭に怒りを爆発させる場面にもある。

君はまさに自信満々の様子だ […] 君は死人のような生き方をしているから、自分が生きていくということにさえ、自信がない。私はといえば、 […] 私は自信を持っている。自分について、すべてについて、君より強く […] (I, p. 211)

ムルソーは、自分の正当さにふれながら強い自信も表明している。

この真理が私を捕えていると同じだけ、私はこの真理をしっかりと捕えている。私はかつて正しかったし、今もなお正しい。いつも私は正しいのだ。 […] 自分の正当さを証明されるあの夜明けを、ずうっと待ち続けていたようだった。 (I, pp. 211-212)

そしてこの場面では、「知る」(savoir)や「わかる」(comprendre)という言葉が反復されている。

そのわけを私は知っている。君もまたそのわけを知っている。 […] 君はわかっているのか、いったい君はわかっているのか？ […] この死刑囚め、君はいったいわかっているのか。 (I, p. 212) (強調下線は筆者)

このように『異邦人』最終章には、強い自信、確実性、正当性、認識をめぐる言葉が多用されている。他方、「妄想」についても同じような語彙の傾向を見出すことができる。

狂人は主人公の部屋で語り始める。そのとき主人公は、その確信に満ちた態度に苛立ちを覚える。

これほど多くの確信にいらだって、ぼくはその狂人に言った。(I, p. 943)

この場面には、『異邦人』最終章のムルソーが感情を爆発させる箇所に通じた要素が存在する。例えば正しさへの言及である。

狂人の言っていることは正しかった。ぼくは、できれば彼が間違いだと思いたかった。(I, p. 944)

そして、「知る」(savoir)や「わかる」(comprendre)という言葉も繰り返し用いられている。

[...] ぼくは、過去の自分のままではいたくないと、とても強く感じてはいたものの、かといって自分が何になりたいのかわからなかったからだ。ぼくは人生の意味を、ぼくが知らないこの生の意味を探し求めていた。[...] 知ろうとしないということは、精神のある幸福な状態をしるしているのだ。[...] 知るということ、人々はみな一つの進歩だと思っているけれども [...] 知ることを拒否することは [...] この私は、生きていることを知ろうとしないで生きている。私は死とか魂についての空しい問題を、あれこれいじくりまわしたりはしない。[...] 私 [狂人] の考えを君にもっとよくわからせるために [...] 私は狂人とは知らずに生きるだろう。[...] 私は、私が狂人だということを知っている。けれども数分したら、私は何もわからなくなるだろう。[...] 今度はぼく [主人公] が、識ろうとしないようにするために [...] (I, pp. 943-944)

(強調下線は筆者)

7) 登場人物の姿勢

司祭の訪問を受けたとき、ムルソーは独房の寝台に横になり熟考していた。

司祭の訪問をまたもや拒絶したのは、こうしたときだ。私は横になっていた。空の黄金色に染まるのを眺めていて、夏の夕暮れの近いのがわかった [...] まさにこのとき司祭が入ってきた [...] 私の粗末な寝台に腰かけて、彼は自分のそばに来てすわるようにすすめた。私は拒絶した。(I, p. 208)

寝台に横になっていたムルソーは、司祭から自分のそばに来てすわるようすすめられるが拒絶する。この姿勢に変化が起こるのは次の箇所である。

今度は私かわきを向いて、天窓の下に行った。私は肩を壁へもたせかけた。

(I, p. 210)

ムルソーは天窓の下へ移動し、肩を壁へもたせかける。その後、司祭に怒りを爆発させる場面の直後、再び寝台に横になるムルソーが描かれる。

彼が出てゆくと、私は平静をとり返した。私は精根つき寝台に身を投げた。

私は眠ったらしかった。(I, p. 212)

このようにムルソーは、まず寝台で横になっており、続いて天窗の下で壁にもたれかかる。そして再び寝台で横になる姿勢へと戻る。

次に「妄想」の主人公の姿勢を見てみよう。狂人がはじめて訪問した際に、主人公がどのような姿勢でいたのかは描かれていない。しかし2度目の訪問時、主人公はムルソーと同じ姿勢をとっている。

ところが或る日、彼がやってきた。[...] 彼は部屋の中を歩きまわっていた。寝台の上に横になって、ほくは彼の言うことを聴き、彼を眺めていた。

(I, pp. 944-945)

主人公は寝台に横になり、訪問者である狂人の話を聞く。これは、ムルソーが寝台に横になりつつ司祭と会話するという状況に類似する。

また登場人物の姿勢をめぐって、訪問者側にも共通点があることがわかる。「妄想」の訪問者である狂人は、先の引用にあるように部屋の中を歩きまわるという行動をとっている。他方、『異邦人』の主人公を訪問する司祭はどうだろうか。司祭はまず、ムルソーの寝台に腰かける。しかし、その腰かけた姿勢を保持してはいない。時折立ち上がるという行動や、腰を降ろすといった姿勢をとっている。司祭の姿勢がうかがわれるくだりを、以下に列挙する。

- ・私の粗末な寝台に腰かけて [...] 彼はしばらくそこに腰かけたなり、自分の手を見つめていた。(I, p. 208)
- ・すると彼はうしろに反り返って、平手を腿に置き、壁に背をもたせかけた。 [...] 彼は眼をそむけ、相変わらずその姿勢を変えずに [...] (I, p. 209)
- ・このとき、彼の手がいらいらしたしぐさを示したが、彼はからだを起こして、その法衣の皺を直した。(I, p. 209)
- ・この言葉を聞くと、司祭は立ち上がって、私の眼のなかを真っすぐに見た。(I, pp. 209-210)
- ・すると司祭はうなだれて、また腰をおろした。(I, p. 210)
- ・このとき、司祭はまた立ち上がった。この狭い独房では、彼が動こうとしても、選択の余地がない、と私は考えた。彼はすわるか、立つかしなければならなかった。(I, p. 210)
- ・司祭は一步私に近づいたが、それ以上前に入る勇気がないというように、立ちどまった。(I, p. 210)

司祭はまず寝台に腰かけている。次に壁に背をもたせかける。その後、一度立ち上がる。しかし再び腰を降ろし、さらにまた立ち上がる。そしてこのとき、狭い独房では動こうとしても、腰を降ろすか立ち上がるかである、とムルソーは考える。ムルソーがあえてこのような考えに至るほど、司祭は同じ姿勢を保持してはいない。

このように「妄想」と『異邦人』は、あまり動かずにいる主人公と対照的に、訪問者が動いているという点においても類似するのである。

Ⅲ

Ⅱ章で見たように、『異邦人』最終章は「直観」の一作品「妄想」とさまざまな面において類似点を持つ。ところでこのことは、『異邦人』最終章のある謎を解明するための手がかりを与えるように思われる。これを示すにあたり、まず本稿Ⅲ章では、『異邦人』最終章の謎についての考察を行う。

最終章の謎とは、ムルソーが突然感情を激発させる行動をとったということ、及びそのときの発言内容の不可解さをめぐるものである。感情を爆発させる一節は、『異邦人』のそれまでのトーンとは全く異なっている。しかしテクストを子細に見ていくと、同じようなくだりが存在することがわかる。それは司祭の行動であり、ムルソーが感情を爆発させる箇所直前に描かれている。

彼の姿が私には重荷になり、私をいらいらさせていた。私は彼にもう帰って、私をひとりにしてほしいといおうとしたが、そのとき、私の方を振り向きながら、不意に彼は大声で、あふれるようにしゃべり立てた。「いいや、私はあなたが信じられない。あなただってもう一つの生活を望むことがあったに違いない」(I, p. 211)

司祭は、突然大声であふれるように話す。そしてこの箇所に引き続いて、ムルソーの感情噴出のくだりが描かれる。

そのとき、なぜか知らないが、私の内部で何かが裂けた。私は大口あけてどなり出し、彼をののしり、祈りなどするなといい […] (I, p. 211)

司祭とムルソーはいずれも、突然感情を爆発させ、大声で相手を罵倒するという点で共通している。さらにムルソーが叫びながら述べる内容についても、司祭の言動との類似を見出すことができる。例えば次のくだりを見てみよう。

この死刑囚め、君はいったいわかっているのか。私の未来の底から […]
(I, p. 212)

司祭が死刑囚である、とはどういうことだろう。ムルソーはこのくだりの数行前にも、同じ内容を述べている。

君はわかっているのか、いったい君はわかっているのか？誰でもが特権を持っているのだ。特権者しか、いはしないのだ。他のひとたちもまた、いつか処刑されるだろう。君もまた処刑されるだろう。(I, p. 212)

人々はすべて罪人であり、司祭も同様に処刑されるのである、という考えを展開している。ところで、ムルソーのこの発言に似た内容を司祭も述べている。下記に引用する。

[...] 私を「友よ」と呼んで、話しかけて来た。彼がこのように私に語りかけるのは、私が死刑囚だからではない。われわれはすべて死刑囚なのだ、と彼はいった。(I, p. 209)

このように司祭は、ムルソーと同じように皆が死刑囚であると述べている。司祭とムルソーの類似は他の諸点でも見出される。

まず、ムルソーが怒りを爆発させる場面で使用されている「底」(fond)という言葉である。この言葉は次のように何度も用いられている。

・喜びと怒りのいり混じったおののきとともに、彼に向かって、心の底をおちまけた。(I, p. 211)

・これまでのあの虚妄の人生の営みの間じゅう、私の未来の底から、まだやって来ない年月を通じて、一つの暗い息吹が私の方へ立ち上ってくる。

(I, p. 212)

・この死刑囚め、君はいったいわかっているのか。私の未来の底から [...]

(I, p. 212) (強調下線は筆者)

他方、司祭も同じ言葉「底」を用いて述べている。

司祭は周りを見まわし、急に疲れ果てたような声で、答えた。「すべてこれらの石は苦しみの汗をかいています。私はそれを知っている。私は苦痛を感じずに、それらを眺めたことはありません。しかし心の底では、私はまた、あなた方のうちのどんな悲惨なひとびとでも、心の闇から、神の顔が浮かび出るのを見た、ということを知っています [...]」(I, p. 210) (強調下線は筆者)

ここで司祭は「心の底」(fond du cœur)という表現を使っている。『異邦人』中、「心の底」は2箇所のみ²⁰である。一つがこの司祭の言葉であり、そして残りの一つが、先にあげたムルソーが怒りを爆発させる出だしの箇所である。そのためここにおけるムルソーは、「心の底」という言葉をすでに発した司祭という人物自体に豹変したように描かれている。

司祭の言動との一致は、他にも認められる。「知っている」という言葉である。このわずか数行で、司祭は「知っている」(savoir)を2度にわたって用いている。他方、ムルソーが感情を爆発させる場面において、「知る」や「わかる」を意味する単語が多用されていることは先にも述べた通りである。

以上のように、感情を突然激発させる箇所のムルソーは、司祭の言動を模倣し写し取るような姿で描かれているのである。

IV

司祭とムルソーの言動は、なぜ類似しているのか。これを考察するにあたり、本稿Ⅱ章で明らかにしたこと、すなわち「直観」の一作品「妄想」が『異邦人』と類似す

るということにもとづいて進めていく。

「妄想」の登場人物である狂人は、本来は他者ではない。主人公の内面に存在するもう一人の自分である。それは、「直観」を構成する別の作品「祈念」や「ぼく自身への回帰」におけるこの同じ人物の描写に明らかである。例えば「ぼく自身への回帰」では、主人公が狂人に次のように話すくだりがある。

[...] そうした他人がいつかやってくるだろうが、その人間は予知能力と直観で、あなたよりずっと強いのだ。彼は、自分がそうしていることを知らずに振る舞うだろう。あなたは、自分がしていることを知っていたのだ。だからあなたは失敗した。だがこの他人とは、もしかしたらあなた自身なのだ。それはまたぼくかもしれない [...] (I, p. 951)

いつかやってくる他者とは自分自身である。また「祈念」の中に次の文がある。

とある街角で、ぼくは彼と別れた。なぜなら彼というのは、ぼくが自分の目の前で行動するのを眺める習慣があったあの「私」でしかなかったからだ。彼は消えた。というのはぼくが、理想と無限への同一の願望のなかで、観客と俳優をとうとう一つにすることができたからだ。(I, p. 951)

この箇所は、『異邦人』最終章における司祭とメルソーの類似という謎を考察する上で、極めて重要な一節である。「直観」の登場人物である他者がもう一人の自分であったように、『異邦人』最終章に描かれた司祭とは、メルソーの内面に存在するもう一人のメルソーに他ならない。

また『手帖』²¹の1936年付の文章に、『異邦人』の母胎となった小説『幸福な死』の主人公パトリス・メルソーに関する次のメモがある。

パトリスが自分の死刑囚の話をする。「ぼくには見えるんだ、その男がね。彼はぼくの心のうちにいる。そして彼の一言一言がぼくの心を締めつけるのだ。彼は生き生きとして、ぼくと共に呼吸をしている。恐怖を抱くのもぼくと一緒だ。……それにもう一人、彼を宥めようとする人間がいる。その男もまたぼくのうちに生きている。ぼくは毎日この司祭を彼のもとに送って、気を挫こうとしているのだ [...] パトリスが言う。「いまやぼくに分かっているのは、ものを書くということだ。それは死刑囚の話になるだろう。ぼくは書くというぼくの本来の役目に立ち戻ったのだ。」(II, pp. 810-811)

死刑囚や司祭は、『幸福な死』の決定稿には描かれていない。これらは『異邦人』の登場人物である。そのためこの文章は、『異邦人』に結実するに至ったメモでもある。ここで主人公は、心の中に存在するもう一人の自分について話している。もう一人の自分には2種類存在し、一方は死刑囚であり、もう一方はその死刑囚を毎日訪れる司祭である。何度も訪れる人物がいるということ、そしてその人物がもう一人の自分であるという点は、「直観」に描かれた狂人及び『異邦人』の司祭にも共通する特徴である。『異邦人』最終章の司祭とメルソーの言動がなぜ類似しているのか。それ

は、「直観」という作品を通して明らかになったが、『手帖』中のこのメモによっても確認された。

尚、『手帖』に記された構想メモにおける主人公は、ムルソーとは異なって死刑囚ではない。もの書きをめざしている人物である。もの書きを志す主人公像は、『異邦人』には見出すことができない。しかし主人公ムルソーとしてではなく、語り手のムルソーという形でその強い存在感を示している可能性がある。『異邦人』における語りの由来を探究するにあたり、この方向からも解釈ができるのではないだろうか。

結

以上で示したように、「直観」と『異邦人』最終章はさまざまな面において類似点を持つ。そしてこれは、『異邦人』最終章におけるある謎を解明する手がかりも与えるものである。『異邦人』最終章では、刑務所付司祭の言動を写し取るような形で主人公が描かれている。この様相が形成された要因を探究するに際し、本稿では小説「直観」を通して考察を行った。考察を通じ、刑務所付司祭とは主人公のもう一人の自分として解釈可能であることが明らかとなった。そしてこのことは、創作ノート『手帖』に記された構想メモによっても裏付けられることが確認された。

未発表作品「直観」は、その内容が直接『異邦人』へと結実する要素を持っていたがゆえに、刊行されなかったのではないだろうか。一般に、未発表作品は刊行作品よりも高い価値が与えられない傾向がある。しかし本稿で述べたように、それらの中には極めて重要な草稿資料としての意義を持つものが含まれている。このことから、未発表ゆえに等閑視されている他の諸作品の中にも、高い価値を持つ重要資料が存在する可能性も示唆された。尚、本稿では「直観」を構成する5つの作品のうち、主に「妄想」をめぐる分析に終始した。他の4作品を子細に扱うことを通じた考察については、別稿に譲りたい。

注

1. Jacqueline Lévi-Valensi, *Albert Camus ou la naissance d'un romancier*, Gallimard, 2006, pp. 56-80.
2. Paul Viallaneix, *Le Premier Camus, suivi de Ecrits de jeunesse, Cahiers Albert Camus 2*, Gallimard, 1973, p. 296. 邦訳は、高嶋正明訳『直観』、新潮社、1974を参照した。尚、ポール・ヴィアラネーによって並べられた順序は次の通りである：1 *Délires* (妄想)、2 *Incertitude* (不確実なるもの)、3 *La volonté de mensonge* (嘘にとどまろうとする意志)、4 *Souhait* (祈念)、5 *Retour sur moi-même* (ほく自身への回帰)。
3. Albert Camus, *Œuvres complètes I 1931-1944*, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 2006, p. 941. 以下Iと略記し頁数と共に示す。
4. 西永良成『評伝アルベール・カミュ』、白水社、1976、pp. 28-29。
5. Jean Grenier, *Les Iles*, Gallimard, 1959, p. 13. 邦訳は井上究一郎訳『孤島』、竹内書店、1968を参照した。

6. Paul Viallaneix, *op. cit.*, p. 127.
7. *Ibid.*, p. 127.
8. 『裏と表』の邦訳は佐藤朔、高嶋正明編『カミュ全集』第1巻、新潮社、1972を参照した。
9. 白井浩司『アルペール・カミュ その光と影』、講談社、1977、p. 30。
10. 同、pp. 30-31。
11. 同、p. 30。
12. Jacqueline Lévi-Valensi, *op. cit.*, p. 69.
13. *Ibid.*, p. 66.
14. Albert Camus, *Œuvres complètes II 1944-1948*, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 2006, p. 824. 以下IIと略記し頁数と共に示す。
15. Jacqueline Lévi-Valensi, *op. cit.*, p. 73.
16. 『異邦人』の邦訳は、窪田啓作訳『異邦人』、新潮文庫、1954を参照した。
17. Paul Viallaneix, *op. cit.*, p. 30.
18. 『異邦人』における「待つ」という概念の重要性について、次の拙稿を参照されたい：『『異邦人』の語りの形式について』、『山形女子短期大学紀要』第30号、1998、pp. 1-16。
19. Alfred Noyer-Weidner, «Structures et sens de *L'Étranger*», *Albert Camus 1980*, University Presses of Florida, 1980, p. 82.
20. 『異邦人』における「底」(*fond*)の使用頻度について、次の図書を参照した：Herausgegeben von Manfred Sprissler unter Mitwirkung Hans-Dieter Hänsen, *Albert Camus Konkordanz zu den Romanen und Erzählungen*, Band I, Georg Olms, 1988.
21. 『手帖』の邦訳は、大久保敏彦訳『カミュの手帖 (全)』、新潮社、1992を参照した。